

「門徒さん大事にお寺を守る」

東日本大震災から11年

東日本大震災から11年。被災地の今を生きる若者の声を聞こうと避難先の福島県いわき市で暮らす皆川利輝さん(32、富岡町・光西寺衆徒)を訪ねた。原発事故で長年、避難指示区域になっていた同寺は今もなお、約50キロ離れたいわき市の「分院」を寺院活動の拠点としている。利輝さんは93歳の祖父・利善住職を支え、寺の法務に携わっている。

11年前の3月11日、利輝さんは京都にいた。宗門校の龍谷大学で真宗学を学ぶ3年生。いつもは春休みを富岡町で過ごす、アルパイト先の学習塾の生徒たちの受験を見届けたいと帰省をやめていた。前日、故郷の仲間から「今からみんなが集まるぞ」と誘いの電話があった。それが、11年前の記憶。

11年前の3月11日、利輝さんは京都にいた。宗門校の龍谷大学で真宗学を学ぶ3年生。いつもは春休みを富岡町で過ごす、アルパイト先の学習塾の生徒たちの受験を見届けたいと帰省をやめていた。前日、故郷の仲間から「今からみんなが集まるぞ」と誘いの電話があった。それが、11年前の記憶。

原発事故が起こり、故郷は「帰れない場所」になった。すぐさま家族の元に飛んで帰れたかったが、祖父や両親も原発から逃げていた真った中。「今帰っても何もできない」と、京都にとどまったという。祖父は高校教師で、父・利道さん(65)も小学校の先生。「2人の背中を見て育ったからか、昔から子どもが大好きで、ずっと中学校の英語教諭になりたかった。震災後、教育実習も修了して教員免許を取得したが、教員になる夢は断念した。「僧籍を持つが父には小学校の勤めがある。80歳半ばの祖父がいわき市に分院を構え、県内外に離散する門徒の法務を一人で、生活の再建や原発事故の賠償手続きを進めるには負担が重過ぎる。手伝えるのは自分しかないかった」

大学を卒業して中央仏教学院で学び、24歳でいわき市に戻った。分院には祖父と叔母家族が同居しているため、アパートを借りては遠方へ法事に出る祖父の運転手。不便な避難生活を送るご門徒が、祖父の姿を見て「元気をもらった」とうれしそうな顔をしているのを目の当たりにし、胸が熱くなった。



いわき市の分院で寺院の現状を語る皆川利輝さん(中央)。左は祖父の利善住職、右は父の利道さん

最初は「じいちゃんのよいうに」という周囲の期待にプレッシャーを感じていたという。しかし、祖父と一緒に法事や葬儀に参り、いろいろな話を聞き、門徒一人一人と言葉を交わすうちに、いつしか、「僕はじいちゃんと同じようにはできない。でも、お浄土に咲く花が青い花は青い光、黄色い花は黄色い光を放って、それぞれに尊いと説かれるように、僕は僕なりの色で

いいんだ」と受け止められるようになった。いわきに戻って8年。法務と並行して生活のために学習塾とコンビニでも働く。塾は専任講師の誘いもあったが、突発的に入る臨終修行や葬儀で子どもたちに迷惑をかけられないと断った。自分で決めた道と納得はしつつも、時々、学校の教壇に立つ自分の姿を思い浮かべ、「震災さえなければ」という思いが頭をよぎる。

富岡町の避難指示は解けているが、町の復興は始まったばかり。「富岡に帰ってきて」と願う門徒もいるが、いわき市や郡山市、福島市などに暮らす門徒にとっては、この分院のままでという願いもある。

定年退職した父もサポートしてくれるが、自分が寺を継いでいくという固い決心は変わらない。山積みの問題を抱え「決して上手くいっているとは思わない」が、だからこそ今は、祖父や父、先人がしてきた「門徒さんを大事にお寺を守る」姿勢を受け継ぎ、生きていきたいと考えている。